

交差保育法の実践・その二



二 交換保育

1 物の交換を通してきく組とタンポポ組の子どもたちは知り合う。

——十月二十五日（月曜日）のつづき——

ザベリオ幼稚園の大塚先生から預かってきた手紙とクッキー、それにビニールの袋を持って富田幼稚園のタンポポ組の子どもたちは幼稚園の裏の林に向う。なだらかな坂道を十分も歩けば林に出る。林のそばの刈田にはどんぐりの実がたくさんおちている。

「そういえば、きのう先生が手紙をよんだとき、ザベリオではどんぐりが少ないのでとりこしますって、かいてあったわよ」と先生がいうと、子どもたちは、さも意外だといわんばか

宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導 大戸 美也子

りに「へえっ！」と大きな声をあげ、次々どんぐりを拾いビニール袋に入れていく。袋に半分近くどんぐりがはいったのに「じゃあ、ザベリオのお友だちがきたときになくならないように残しておきましょう」といって、一まずどんぐり拾いをやめ、近くにある別のならの木の林へ移る。その林のわきには野原が広がっているのです、皆こしをおろして、ビスケットを食べることにする。子どもたちは、ビスケットを食べながら大塚先生の手紙をよんでもらう。

大塚先生の手紙

「さとうせんせい おてがみありがとうございます。きくぐみの子どもたちも、うれしいおたよりをなんどもよみかえして、とみたようちえんのかよこせんせいとたんぼぐみのおともだちのことをかんでいます。どんぐりやまつぼ

つくりがたくさんおちていることをしって、おおきなふくろをじゅんびしなくちゃ」と、いっています。やまのなかのひみつのばしょも、あんないしていただけたらもつとびっくりすることでしょう。

ようちえんのまわりはおみせがたくさんならば、どうろはじどうしゃがたくさんとおるのでエンジンのおとがうるさいです。おにわにはかれはがおちています。ともだちはたくさんひろってきて、きんぎょ、おかし、ロケットをつくっておみせやごっこをしています。そして、ときどきハーモニカもふきます。ちゅうりつぶのきよくをふくのがだいすきです。とみたようちえんのおともだちにもきかせてあげたいです。10がつ29にちに、とみたようちえんへいきたいとおもいますがごつごうはいかがですか。よいへんじをまっています。では、ごきげんよう。

たんぼぼぐみのみなさんへ

さとう かよこせんせいへ

さくぐみ

おおつか あさこ

子どもたちは、大塚先生の手紙を聞きながら「ビスケットありがとう。おいしかったよってお手紙書こうかな」など口々に

いう。手紙を読みおえるとあせ道があるいて山へ向かう。あせ道の枯草がフワフワしてあんまり気持ちがいいのでそこにすわって、さく組の友だちの手紙を読むことにする。一人に二、三枚ずつくばり、互いに交換しあって読む。

「かよこせんせい おたよりありがとう。とみたようちえんのおともだちおげんきですか。ぼくもおげんきです。ぼくはまいにちようちえんごっこをしてあそんでいます。とみたおともだちはなにをしてあそんでいますか。さくま かつゆき」
「かよこせんせい おげんきですか。わたしはすぐにやすんでしまいます。やすんだときに、すぐおせきがかわって、きてみたらどこにすわるのかわかりません。だからすぐにせんせいにきいてしまいます。だけど、どのくらいしたのしめるんですか。こんどいきますからまっています。10がつ29にちにいきます。えは、わたしがかいています。

さくもり あすか

幼稚園の便せんを使って、こんな内容の手紙と絵や模様、きれいかいてある。

「うわあー、字がじょうずだね」

「この絵おもしろいね」

「いろんな色できれい」

「先生！ 29日ってあと何日？」

名前をよんだり、わからない字を先生に聞いたりして、どの子も一生懸命に読んでいます。「29日にいきます、バスで行きます」とか「どんぐりのある場所をおしえてくださいね」とか、子どもたちが返事の手紙を書きたくなるような文面の手紙をとりあげて、先生は皆によんであげる。

「何てお手紙かこうかな」

「どんぐり みんなあげようよ」

「あら、このはっぱきれいだ。私、このはっぱを使って手紙かこうと」

子どもたちは、山から幼稚園へ帰る途中こんなことを話しながら歩いている。

保育室につくと、子どもたちは改めてきく組の手紙をよみかえしたり、大塚先生の名前を確認したりする。先生は、朝用意しておいたキリン紙を机の所にもってきて「手紙をかきたい人は、ここから紙をとっていいですよ」といい、つづいて黒板に「おおつか あさこせんせい きくぐみ」と大きく書く。子どもたちは全員、紙をとって思い思いに手紙を作り出す。定規で線をひいて使せんを作る子。のりやセロテープを使って封

筒を作る子。山で拾ってきた落葉をセロテープではる子……。

先生は子どもたちの間をまわりながら、わからない字は先生やお友だちにきくこと、お話をしてくれたら先生が手紙をかくこと。絵をかいてもよいこと等を話す。

そして、先生もまた富田幼稚園にはタンポポ組の他に、レンゲ組とスマレ組のあることをきく組に知らせるために手紙を書く。

十月二十六日（火曜日）

富田幼稚園のタンポポ組では、きのう大塚先生に会ってみんなの手紙とどんぐりを渡したことが伝えられる。

「先生、ぼくの手紙やったかい、本当に？」

ザベリオ幼稚園のきく組では、タンポポ組からの手紙が披露される。

合同の集りを終え、子どもたちが保育室にはいつてスマックに着替えている所へ、青い大きな袋をさも目立つように持って先生がはいってくる。

「お手紙がときましたよ！」

「うあーい。とみたようちえんからだー」と子どもたちは歓

声をあげる。

「どんなお手紙かしらね」といいながら、大きなキリン紙で作った便せんやいろいろな形の封筒、あるいは落葉のはりつてある手紙や変わった折り方の手紙をとり出して皆に見せながら、読んでいく。

「おおつか せんせい。びすけっと おいしかったです。わたしのおうちはきれいです。わたしのおともだちは あきです。」

いまいずみ ひろみ

「おおつかせんせい、きくぐみのおともだち おげんきですか。わたしもおげんきです。きくぐみのおともだちはなにをしてあそんでいますか。わたしはかみにはんこをおしてあそんでいます。」

ふじわら ようこ

キリン紙一ぱいに、幼稚園の絵、幼稚園にある青い自動車の絵、ロケットの絵などの描いてある手紙もある。

「へえー、青い自動車もあるの」

「ほんとかなあー」

「うわあ きれいだ。ほんとうのおはなだ」

「おおきな手紙だなあ」

「長い手紙もあるのね」

手紙をきいたり、見たりしながら口々にこんなことをいう。友だちの名前にも興味をもって、何度も反復しながら覚えようとしている子どももいる。手紙をよみ終えると、手紙と一しょにとどいたドングリの実がくぼられる。

「このどんぐりはね、富田幼稚園の林でおともだちが拾ってくださったのよ」と紹介されると、子どもたちはドングりを大切そうに手の中につつまこむ。

2 物の交換を通してきく組とレンゲ組・スマレ組が知り合う

ザベリオ幼稚園のきく組から手紙とクッキーが届き、富田幼稚園のタンポポ組から手紙とどんぐりが届いて、きく組とタンポポ組はようやく相手を具体的に知ることができた。しかし、富田幼稚園には、他にレンゲ組とスマレ組とがあつて、ザベリオ幼稚園のきく組の子どもたちは、この二組の子どもたちとも知り合いにならない。そしてレンゲ組、スマレ組の子どもたちもまた、ザベリオ幼稚園のきく組の子どもたちとも知り合いにならない。

「きくぐみのみなさんへ」

おてがみたくさんありがとうございます。きょうは どんぐりのみが どこにたくさんおちているか さがしに きました。そして くさのうえにすわって みなさんからのおてがみを見ました。ザベリオには どんぐりがすくないので とりっこします” という おてがみをよんで たんぼぼぐみのおともたちは ひろったどんぐりをみんなビニールのふくろにいれてくれました。なかよくわけてくださいね。もっと いっぱいあるんだけど きくぐみのおともたちがきたときに なくならないようのこしておきました。

とみたようちえんには、たんぼぼぐみのほかに、れんげぐみとすみれぐみがあります。そのおともたちにも みなさんからのおてがみを見せることにしました。

えんちようせんせいやれんげぐみのせんせいやすみれぐみのせんせいとそうでしたら 10がつ29にちにくてもいいですよ、ときまりました。

あたたかくて よいおてんきになるといいですね。

とみたようちえん さとうかよこ

どんぐりをわけてもらったあと、佐藤先生のこんな手紙を読んでもらう。

「どんぐりで何かできないかしら。何かほしいものがあつたら、先生あげますよ。どんぐりに穴をあけたい方はあけてあげます。手紙のかきたい方は紙もありますよ」先生がキリン紙、

折り紙、ツマようじ、セロテープ、ホッチキスなど用意したすと、子どもたちはひとりひとり自分の必要とする材料をとって製作や手紙をかきはじめる。タンポポ組の友だちの手紙をみながら、キリン紙に線をひいて便せんを作る子、キリン紙の半分に折り紙で家や模様をおってはりつけ、残り半分にその模様の説明や手紙をかく子、どんぐりに穴をあけて“こけし”を作り紙にはる子、それぞれ工夫をこらして手紙を作っている。作品が出来あがると、先生の用意した大きな紙袋に入れていく。

きく組の子どもたちは、タンポポ組の手紙をみたり、どんぐりの製作を通して、「富田幼稚園へ」「こんど行くんだ」という期待がいっそう高まってきたようである。

同じ日、富田のレンゲ組、スマレ組でもザベリオ幼稚園のきく組の紹介が行なわれる。

レンゲ組では、昨日はじめて子どもたちに生活発表をやってみた。六割ぐらいの子どもが得意気に話し出したが、女兒は恥ずかしくて話さない子どもが多かった。(注1レンゲ組は年長

一年保育組、園児数は18名である)

いつもより早くお集りをよびかけると、子どもは戸惑ったようすで「先生！なにすんの？」「あつ、そうだ、きのうみたいにひとりずつしゃべるんだよ」と口々にいいながら保育室にはいつてくる。きのう、何となく話したいふうで恥ずかしがっていた女の子が「きのうみたいにやるの？」とにこにこして先生に話しかける。

「そう、きのうみたいに前に出てお話しできる人いますか？」ほとんどの子どもが手をあげるが、きのう話さなかった子どもにあてる。

「先生もみんなに話したいことあるんだけど話していいかしら？」

「ウン」「先生何したの？」「いいよ」

「先生のお話はこれ」といって、ピアノの上のにせてある大きな紙袋(ザベリオからの手紙)を重そうにかかえて、だまっただま切手やあて名をゆっくり指で示していく。

「あっ！手紙だ。ずい分デッカイナー」

「先生どこからきたの？」

「そう、これは手紙ですね。誰が誰にだしたのかな？ちよつとよんでみるからね」あて名、さし出し人のところをゆっくり、

はつきりした口調で読んでいく。

「知っているよ ザベリオ幼稚園。ともだちそこに行ってるんだよ」

「どうしてザベリオからお便りが来たのか、これからお話ししましょうね」

たんぼぼ組の佐藤先生とザベリオ幼稚園きく組の大塚先生が友だちであること。佐藤先生が大塚先生に手紙を出したら、大塚先生ときく組の友だちから返事がきたこと等を話し、きく組の友だちの手紙を一枚ずつ読んでいく。

「どんぐりのとり合いっこ……」という所で「じゃあ、拾ってやるといいよ」と声がかかる。読み終えると、グルーブごとにその手紙をくばる。どの子どもも、手にとってじつと見入る。字の読めない子どもは、読める子どもにききながら長い時間をかけて一枚の手紙をみている。

今日は雨なので、子どものいつていたどんぐり拾いは出来そうにないので、そのままへやで手紙かきはじまる。ふだん人の絵を描いたこともない男児が、自分を描いている。スモックをきて胸には名札まで付けてある。全員が、絵をかいたり、折り紙をおったり、キリン紙にます目をつけて手紙を書きはじめたりする。小さな袋を作って、自分のどんぐりを入れている子

どももいる。

全員が書きあげたとき、今日中に送ることを子どもたちに約束する。

昼食のとき、先生は「ザベリオのお友だち、富田にくるのがはじめてなんだけど、迷わないでこられるかしら」とひとりごとのようにつぶやくと、

「先生！ 地図かいてやるといいよ」

「あっ！ いいこと考えたわね。じゃあ、大島（注2）から来るといっていたから、大島の道おしえてあげようか。大島のお友だちがかいてくれるといいんだけど。お弁当食べたら地図を作りましょうね」

注2 大島は園の目の先にある部落の名前。幼稚園が小高い所にあるので、田んぼの中の林にかこまれた大島の部落全体が鳥かんの図のように見渡せる。

「うん、いいよ」大島から通っている四人の子どもは、皆の前で仕事をまかされたので意気込んで答える。

昼食後、この四人が中心になって大きな模造紙を机いっぱい広げて地図作りがはじまる。先生は、幼稚園と大島のバス停留所（ザベリオの子どもたちはここでおりる）の位置だけを指示し、途中の道すじは子どもたちが考えることになる。いぎ書く

段階になると、毎日歩いている道でもどこでどう曲がるかわからないでいる。そのうち、ひとりかへやの中をぐるぐる歩きながら「こう曲がって、こういって、こう曲がって」とつぶやく。こうして道順が出来あがると次は目印になる建物、状況をかきこむ段階にはいる。四人で考えていると「私、大島知っているよ」と女兒がクレヨンをもって仲間に加わり、橋、川、家などを描きはじめる。地図のまわりでながめていた子どもたちも地図に注文をつけはじめる。

「そうねえ。大島がよくわからないお友だちには、幼稚園を描いてもらおうかな？」先生の呼びかけに三人の女の子が応じ、園舎をかきはじめる。それをみていた男児が「ここにマイク（スピーカーのこと）ついているよ」と描かれた園舎の一部を指で示す。女の子急いでマイクをつける。

「幼稚園のおへやだけじゃなくて、庭のいろんなものをかいたら？」スピーカーを指示した男児は「じゃ、ぼく、外に行ってみてくるから」といって外に出る。外にある遊具を確認してくると、園舎を描いている三人の女の子に報告し、再び外へ出ていく。

「道は細い線じゃわからないから、この色でそめた方がよくわかるみたいね」先生は茶色の絵の具と筆を数本もつてくると、

近くにいた男児一、女児二が新たに加わる。そして、たんねんに塗りはじめ。そのうち外に出ては遊具の位置を報告している男児にさそわれ、外であそんでいた男児も三人加わる。この三人は大島の方をながめ、「田んぼをかいた方がいい」といい出し、さらに竹やぶも地図に描かれていく。ほぼ全員の子どもが地図作りに参加し地図ができあがる。みんなさも満足そうな顔つきである。

お帰りの前に、皆の前に出来あがった地図が広げられ、大島の停留所から幼稚園までの道順をたどってみる。

「きょう、みんなでかいた手紙と地図は、先生がきょう必ず出しておきますからね」

「先生！忘れてだめだよ」

年少児のスマイル組では担任の先生からザベリオの子どもたちの手紙が紹介され、もうすぐザベリオの子どもが富田へ遊びに来ることが知らされる。そして、ザベリオには木の実がないことが話されると、山からとってきてあったマツボックリをザベリオの友だちにあげることになる。

この日の放課後、ザベリオの先生と富田の先生とが出会って手紙や地図、マツボックリが手渡される。そして、子どもたち

の手紙への反応の仕方、製作のときのようすなどが話し合われ、交差保育までに実現しておくことなどが相互に打ち合わされる。

解説

今回は、二園の子ども集団が相互に理解していく過程が描かれている。

保育を交換する場合、交換対象の存在を第一に知らなければならぬ。そして、この事例のように特定の幼稚園のクラスと特定の幼稚園の全体とが交換する場合には、交換対象の幅を双方に広げる必要がでてくる。第一段階では「物」が有効に働く。そして第二段階では、教師のチームが有効に働く。この事例では、手紙やクッキー、どんぐりなどが媒介となったが、物の選択、その生かし方を検討することで多様な交換の方法が考えられよう。また、タンポポ組の先生が媒介となって双方の幼稚園の子どもたちに他集団の存在が知らされ、それを知らされた先生方が発展的に子どもの中にもっていった。チームの組み方、先生の発展的な事態のとらえ方によって、ここにもまた多様な交換の方法が考えられる。

(つづく)